

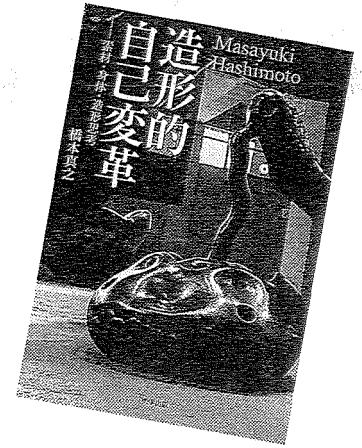
橋本真之 著

▶ 造形的自己変革

素材・身体・造形思考

G・23刊 四六判224頁 本体2400円

美学出版



異物を抱えた真珠貝の分泌に 造形の理路を探る

突き詰めた錬金の造形思考・凜として透徹した言葉の訓育

稲賀繁美

日本語で書かれた造形論として、歴史に残る名著である。過激なる陶芸家の中村錦平は、本書中僅か一頁の短編「茶碗考」を『南方録』の衣鉢を継ぐ洞察と絶賛している。だが本書は安易に書評を許さない。著者との真剣勝負を受けて立つ覚悟が求められるからである。

まず、著者の幼く日本語の的確さ、語彙の鋭さは尋常ではない。「言葉は切れ味鋭い刃物に似ている」。その事実を著者は「造形」の「素材」たる鉄板や銅板との「格闘」から体得した。だがここで括弧に括った何気ない日常用語ひとつひとつが、鍛金の場で対峙し、絞り込むと、解体されてゆく。常人の無感覚や鈍感さが、著者には耐えがたい不快感を呼び覚ます。

本書には著者幼少時以来の

形」するのではない。となれば鍛錬の相手は「素材」などとは呼ばまい。鉄は舐めると血の味がする。銅板は鉄より柔軟だが、槌を抜こうとするに粘りついて抵抗する。それぞれの物質は厚みと季節で性格を変え、肉体に異なる影響を及ぼす。両者の聞き合いとしての造形の奔流に身を任せれば世の中の因習を突破する。だが「丁寧」に問題を熟視徹底すれば「世を律する規則」の根底が揺らぐ事態に至る。その両極のあいだの揺蕩を、あえて妥協と呼ぶまい。仕事の条件がそこに姿を現し、その空隙の間に「作品」が無制限増殖の生成を遂げてゆく。

だがその揺れをどう語るのか。「常套句で語れるほどのことであるなら、あえて語るほどのことではない」。自我を素材に押し付けるのでもなく、素材と戯れる慣習を無我と錯覚する誘惑をも退ける。

両者の隘路に拓かれる道が「造形」であり、それを手の内に思考する。それが「私の前の銅」と「私の右手の金種」なくしては始動しえない「造形思考」の姿である。

それはあるいは体内にゆくりと結石を育む管みであり、貝類が自らの分泌物として真珠を成長させる過程にも似る。そのさなかで「存在の上澄み」として「手の思想」も顕現する。造形が作者の自由であるかに振る舞うのは欺瞞だと著者は言う。方法を選ばず自由とは、不自由を選択する自由である。素材には固有の方法が潜在し、固有の理路が発汗するように滲み出し、やがて分泌物のように形をなしてゆく。地殻変動の隆起や陥没のように。

この視点から著者は、形態の完成を踏み抜いたミケランジェロの無体に感嘆し、非人情な離人症のうちに感情を統御するファン・ゴッホの清澄な自己把握に脱帽する。生ける人体の1cmの裡に宇宙を捉えたジャコメッティ、その「失敗に向けて薄戻されつくした、孤立した願望の生」への著者の讀仰もそこにある。反対に感覚の鈍磨を許容する自我の怪物的肥大に、著者は疑問を呈さずにはいない。スポーツの勝敗は、規則を無前提の柵として、根拠を問わずそこに幽閉された保守主義者の墓碑である。時代を隔てたふたりの勇者が両者の絶頂を綴られている。

頭脳の描、設計図が事前にある腕力でそれとって造り、貝類が自らの分泌物として真珠を成長させる過程にも似る。そのさなかで「存在の上澄み」として「手の思想」も顕現する。造形が作者の自由であるかに振る舞うのは欺瞞だと著者は言う。方法を選ばず自由とは、不自由を選択する自由である。素材には固有の方法が潜在し、固有の理路が発汗するように滲み出し、やがて分泌物のように形をなしてゆく。地殻変動の隆起や陥没のように。

この視点から著者は、形態の完成を踏み抜いたミケランジェロの無体に感嘆し、非人情な離人症のうちに感情を統御するファン・ゴッホの清澄な自己把握に脱帽する。生ける人体の1cmの裡に宇宙を捉えたジャコメッティ、その「失敗に向けて薄戻されつくした、孤立した願望の生」への著者の讀仰もそこにある。反対に感覚の鈍磨を許容する自我の怪物的肥大に、著者は疑問を呈さずにはいない。スポーツの勝敗は、規則を無前提の柵として、根拠を問わずそこに幽閉された保守主義者の墓碑である。時代を隔てたふたりの勇者が両者の絶頂を綴られている。

「人は何か他愛のないものと接触しながら自意識の充足する場を育てて行く」。その訓育の道程がここには誠実に、聊か頑固に、しかし諦念とともに珠玉の言葉によって綴られている。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）